始

70-325

帝國圖書館藏

最新朝顏培養法

松澤淳水著

松澤商店發行

大正
5. 1. 12
內交

自序

朝顔は夏より秋に掛けて赫々たる旭日を浴び、白露を含みて一異彩を發する者にて、其容姿の艶麗佳美なる轉た吾人をして快哉を叫ばしむる者で有ります。

抑も朝顔を培養して是れを愛賞する事は、獨り心目を樂ましむるのみならず自然の衛生に叶ひ、身體の健康に偉大なる効力有るは勿論、是れが培養に當りては多くの費用と手數とを要せず、又老幼婦女子にても克く容易に行ひ得られ、而して其趣味津々たるは、恐らく他に比敵する者とても非ざるべし、然るが故に朝顔の培養は都鄙一般に普及し、年々歳々其旺盛を見る、然りと雖も、世には是れが培養の方法を知得せず、折角善良種

を有しながらも可惜野の草と其歩を同ふする者も亦尠しとせず斯界の爲め實に遺憾に堪へざる所なり。

茲に於て予は淺學菲才を顧みるの暇更に無く、從來予の實地經驗に憑りて得たる所の者と、他書に憑りて得たる者とを網羅して同好者諸賢の參考に資せんとす、本書にして萬一世の稗補ともならば、予の幸甚之れに過ぎず。

書中若し誤謬の缺點有らば通告垂教を賜はらんことを、予は後日改訂增補して貴囑に背かざらんとす。

大正四年十一月大嘗祭の日

著者誌

最新朝顏培養法

目錄

第一章　培養の土地……一
第一項　圃地……一
第二項　培養土……二
第二章　苗床……三
第三章　播種……四
第一項　播種期……四
第二項　播種の方法……五
第四章　苗の撰擇……七
第一項　苗の良否……七
第二項　苗の鑑定……八

第五章 移植法……一一
第六章 鉢植……一三
第七章 雨覆……一五
第八章 名札……一六
第九章 支柱……一七
第十章 灌水……一九
第十一章 施肥……二一
第十二章 手當……二三
第十三章 繁殖法……二六
第一項 實生法……二六
第二項 挿木法……二六
第三項 接木法……二七
第四項 宿根法……二八

第五項 朝顔の變種……二八
第六項 人工媒介法……三〇
第十四章 朝顔の妙法……三一
第一項 人工夜開法……三一
第二項 人工變色法……三二
第三項 水揚法……三三
第十五章 種子……三三
第一項 種子の良否……三三
第二項 種子の採收……三五
第十六章 朝顔の標本……三七
第一項 寫生畫と寫眞……三七
第二項 腊花……三七
第三項 アルコール浸液……三八

第十七章　朝顔の來歴……四一
第十八章　朝顔の種類……四五
第十九章　朝顔の説明……五一
第一項　花色……五一
第二項　葉……五四
第三項　蕚と苞……五九

目錄終

最新朝顔培養法

松澤淳水著

第一章　培養の土地

第一項　圃地

朝顔を培養せんとするには先づ其土地を撰擇せなければならぬ、元來朝顔は日光の透射宜しく、且つ乾燥の土地なれば能く生育もし又其花の色澤も艶美なれども、若し之れに反する時は、其葉莖共に性質弱く、且つ光澤無く、剩へ一種の惡癖を生じ、到底滿足なる生長をなさず、從つて良花の咲かざる者で有る、然れば其圃地は日當り風通り好くして濕潤ならざる土地を撰び、豫め能く耕耘し、木、石瓦又は雜草根等を除去し、土塊を碎きて細土となし、原肥と

して人糞尿、堆肥又は魚肥、人造肥料等を施與し置くが善い。

此圃地にて朝顔を培養すれば手數を要すること尠しと雖も、其代りにて優美なる良花を咲かしむることは不可能で有る、然れば美花を望む者は鉢植とすることが肝要で有る、但し種子を採收せんとするには圃地の培養が得策で有ります。

第二項　培養土

朝顔を鉢植（又は箱植）となすに當りて、最も注意を要するは培養土で有る、此培養土が若し不適當の者なりせば土地の不良なると同じく如何に丹精を擬すとも可惜不結果に終る者で有る、然れば苗を栽植して後之れが灌水をなすも其土の堅硬とならざる者、即ち

（イ）腐敗せる草木葉に土を交へて克く混合したる者。

（ロ）塵芥の腐熟して土の如くなりたる者。

（ハ）圃土に籾殻又は藁、刈草等を混合して能く腐熟したる者。

（ニ）溝土或は池沼等の底土に石の混淆せざる者。

（ホ）河砂に切藁の混合して能く腐熟したる者。

右の内にて其何れかを採り、冬期中に人糞又は鶏糞、蠶糞、或は油粕、干鰮等の肥料を能く混淆し置き、春三月頃に之れを篩に通したる者を培養土として使用するが善い、而して（イ）（ロ）（ハ）の者には各其土に砂四分乃至五分を混合することが肝要で有る

第二章　苗床

朝顔の苗床には地床、鉢床、箱床の三別が有る、而して地床は其種子を播下せんとする以前に土地を淺く耕鋤し、土塊を碎きて細土となし、之れを篩にて能く篩ひ通し、夫れに砂を適宜に混合して拵へ、又鉢床、箱床は圃土の篩ひたる者五分に砂五分の割合に調合するか、又は多量の砂に籾殻の腐熟したる者少量を混淆して拵へたるものを用ふるが善い（苗床用の土と培養土とは其調合を異にするを

要す）而して其鉢又は箱の底部には小砂粒を入れて其水拔きを好くし、又其床土の上面は手掌或は小板等にて少しく壓へ、土面を平垣ならしめて種子を蒔くが宜しい、若し苗床の土堅きに過ぐるか或は土面に凸凹有る時は種子の發生惡しく、又發生するも往々飛び上り苗となり、或は俗に云ふ石種子とて發芽せざる者を生ず、又其土の深き場合卽ち深耕せる地床、或は深き鉢又は箱等を用ふる時は、其莖根部のみ徒らに伸長して良苗を得ざると有れば注意肝要で有る。

第三章　播種

第一項　播種期

朝顔の種子を播下する時期は、土地、氣候の如何に憑りて多少の差異は免れざれども、先づ四月上旬より六月下旬頃迄を最も好時期とす、而して正樹物、大輪物は六月上旬頃迄、又變化物は五月上旬より六月下旬迄に播種するが善い、尤も二三月頃に播種して、溫室

或は溫床等にて培養すれば、春より初夏の頃に早くも、其美花を咲かしむる者で有る、世に之れを早作りと稱して珍重がらる、又之れと正反對に遲作りは七、八、九月頃に播種する、而し之れは其手入れを怠る時は能く開花せずして終る者で有る。

第二項　播種の方法

種子を蒔くには撒播と點播との別が有る、撒播は地床に蒔くに適し、又點播は鉢床、箱床等に適當で有る、而して其何れにせよ種子の相重積せざる樣注意肝要で有る、又種子の臍の方を下に向けて蒔けば坊子苗、飛び上り苗等を豫防し得るも、多數の場合にはそは到底不可能の事なれば、其發生の苗に憑りて撰擇することが良策で有る

種子を播下し終らば其上に二三分程砂土を覆ひ、而して其土面の乾燥せざるを度として適宜に灌水をなすことが必要で有る、何となれば若し其乾燥に過ぐる時は種子の發生遲引するのみならず、往々石

種子となりて發芽せず、又濕潤に失する時は種子は腐敗するか、或は莖根の徒らに長き苗を生ずるからで有る、然るが故に地床は播種したる者は雨覆ひをなし、鉢又は箱床等に播種したる者は降雨の際には室内に收容するか、或は雨覆ひをなすことが肝腎で有る。

又播種後多くの日數を經過するも少しも發芽せざる時は、其種子を堀り起して腐敗せるや否やを檢査し、若し腐敗せずして唯だ乾固の儘なる者は、水又は微温湯に浸して能く水氣を吸收せしめて之れを播き直せば能く發芽する者で有ります、大体種子の腐敗するか、又は石種子となるは、其發芽力を失ひたる者は別として、多くは溫度と水分の適度を誤るに憑りて生ずる者なれども、種子の中には外皮厚く且つ堅くして、其子葉發生せんとするも破る能はざる者有れば、此等は種子の臍と稱する部分を鋭利なる小刀にて極く少しく割り取りて播種するが宜しい。

第四章 苗の撰擇

第一項 苗の良否

朝顔の種子は播種後約一週間乃至十日間位にして發芽する、尤も土地と氣候或は播種法の如何に憑りては一ヶ月餘を要することも有る而して其發芽したる苗の良否は、優良なる花を咲くと然らざるとの別るゝ所なれば、之れが撰擇には大に注意し、而して莖葉共に完全にして缺點なき良苗を採ることが肝腎で有る。

彼の坊主苗とて葉となるべき部分なき者、又は之れと正反對に根となるべき部分の生ぜざる者、或は飛び上り苗とて土中に根の一端部のみ有りて其他は土上に飛び上る者、又は莖根部の徒らに伸長したる者、莖或は葉に損所有る者、又は發芽の際に種子の外皮を冠りて生え出づる者等は能く生育せず、又假令生育するも其成蹟良好ならざれば用ゐざるが宜しい、而し万一此不良苗をも用ゐざるべから

ざる場合には飛び上り苗又は莖根部の徒らに伸長したる苗等は早く
に其根部を稍や深く土中に埋め、又外皮を冠りたる苗は日光の直射
せざる場所に置きて、其外皮の常に濕潤なる樣にすれば自然に破綻
して外皮は落下する者で有る、此外皮を手にて剝ぎ取るは宜しく無
い、尤も此等の苗は總ての點に於て良苗に劣る者で有る。

第二項　苗の鑑定

朝顔の苗の撰擇に當りて最も必要なる事柄は其苗を見て果して如
何なる花の咲く者なるやを豫知することで有る、而して其鑑定の方法
としては左の各種が有る。

▲苗の莖より胎葉に至る迄其色を顯はす者は紫、瑠璃、紺色等の花
咲く、但し稀れには莖白くとも紫、紺色等の花咲く事も有る。

▲莖の全体即ち葉際迄各自固有の色を現す者は、赤、紅、桃色等に
して、花色の濃淡は其莖にも亦現出する者で有る。

▲莖の濃紫色なる者は瑠璃色の花咲く。

▲莖より葉の半ば邊迄固有の色を顯す者は鳩、納戸、鼠等の花咲く

▲莖の半ば邊迄色を呈する者は其花色淡き者で有る。

▲葉の着き際迄莖に色を現はす者は其花色濃き者だ。

▲莖に絞りを現はす者は絞の花咲く、而し最初は白無地の莖なるも
日數を經過するに從ひて種々なる絞りを呈する者も有る。

▲莖に色の立筋有れば刷毛目の花咲く、但し無色なれば白き花咲く

▲莖の根際に白色の縱星を現出する者は主に覆輪の花咲く、而して
其縱星の大小は覆輪の深淺を示す者で有る。

▲咲分の花は莖に色の筋有る者、又は其白無地の者より出で、濃色
無地の者は咲分の花咲かず。

▲軸分牡丹の出物は莖軸青白き者より出で、莖色の紅、鼠、紫等
の色を有する者は牡丹咲に非ずして親木となる。

▲二つ葉の總体に細く且つ莖短き者は主に丸咲で有る。
▲葉の大きく張り出で居る者は最大輪の花咲く。
▲葉身細くして其細脈の殊に多き者は主に切咲で有る。
▲葉の平たき者は多く臺咲で有ります。
▲葉の外緣圓形となりて葉に凹入少なく、且つ葉柄直立して葉身との間は節の如くなる者は菊咲。
▲二つ葉の各二枚宛に岐れたる者は菊咲にて大輪の花咲く。
▲葉の上端の葉片よりも下端の葉片狹く、且つ下端の葉片の抱き込む氣味有りて、其尖端の細き者よりは多く獅子咲出づ。
▲葉の上端の間隔狹く、其切目は三分位にて、下端の葉片の間隔の切目七分位なる者は雀咲で有る。
▲葉の上端狹く、且つ全体に平扁にて、其下端の切目の深さ三分位なる者よりは牡丹咲出づ。

▲葉形牡丹咲の者に似て、其上下兩端の葉片平扁なる者は多く孔雀咲で有る。
▲葉形大にして表面に光澤無く、且つ其質粗なる者は唐花咲。
▲葉底の基部狹く、脈も亦少なく、其葉柄の頗る長き者は手長性牡丹の出物にて、其普通の葉の者は親木で有る。
▲肩張り無き小葉にて恰も楓の實に似たる如き者は拂子咲の出物にて、其然らざる者は親木で有ります。

第五章　移植法

朝顔の良苗は鉢、箱或は圃地、花壇等に移植するが善い、此場合には苗の莖葉及び其根部を損傷せざる樣に移植鏝又は竹篦等にて叮嚀に堀起して移植することが肝要で有る。而して鉢仕立の者は最初此苗を小鉢に植え、而して大輪物に有りては本葉の二三枚出でたる頃に之れを中鉢に植え、其本葉六七枚を出したる頃に大鉢に移植し、

又變化物は直に中鉢に栽植培養して早く蕾を出さしめ、又其他の正樹物は蔓の伸長する者と否とに憑りて適宜斟酌して中鉢、大鉢と順次移植するか、又は小鉢より中鉢か或は大鉢に移植するが善い。

元來朝顔は鬚根の非常に蔓り易き者にて、暫時日にて鉢一杯に根詰りとなる者で有る、而して之れを充分蔓延せしめざれば好成蹟を得ざる者なれば、苗を最初より大鉢に定植するは宜しく無い、之れ小苗を直に大鉢に栽植せば其上面は根少くして空虛なるにも拘はらず、其底部のみ根詰りとなりて不良の結果を齎す者で有る、からして斯く二回乃至三四回の移植を必要とするので有ります。

鉢植の苗の移植には豫め其鉢に水を注ぎて苗の分離を容易ならしめ、而して其苗を右手の中指と無名指との中間に狹み、手掌を鉢面に當て、其儘之れを傾斜し、鉢の胴体を左手にて徐々に叩く時は、苗は土と共に拔け出づる者で有る。

而して此等の苗の移植は成るべく曇天の日を撰ぶが宜しい、何となれば晴天の日中炎熱甚しき時に移植すれば、往々枯凋の恐れが有るからだ、然るが故に若し晴天の日に之れを行ふ場合には朝か夕方でなければ不可、而して移植を終らば最初は日蔭の處に置きて強き日光に當てざるとが肝腎で有る、又地植の者は日覆をなし、日を經るに從ひて徐々に日光に當てるが宜しい。

第六章　鉢植

朝顔は地植となすと有るも、多くは鉢植で有る、而して鉢植には大鉢(直徑七八寸位の者)、中鉢(直徑五六寸位の者)、小鉢(直徑三四寸位の者)等各種の素燒鉢を備へ置きて適宜之れに栽植するが宜しい、此素燒の鉢は水分を吸收し易く、又其水分が鉢内に久しく滯留する憂無きが故に最も適當で有る然れど若し体裁を要する場合には、此鉢植の儘を花籠に收容するか或は金屬製又は陶器製の優美なる容器に入るゝが善い。

鉢植には何れも其鉢の底へ豌豆大の砂粒、貝殻、木炭等を入れ、其上へ米粒大の砂粒を入れ、其又上へ第一章第二項に述べたる培養土を入れて苗を叮嚀に植え付くるので有る、而して其苗はかの中央に入れ、其周圍に少量の油粕肥料を施し、鉢に適宜の土を補充し、其上面を少しく壓へ、而して後に少し灌水をなすが宜しい。

而して鉢植の者は鉢棚を作りて之れを並列するが善い、若し然らずして其儘地上に置く時は、往々降雨の際に樹は地上の飛び汁の爲に損害を蒙り、又は誤りて人が樹を損傷する憂が有る、然るが故に鉢棚の設備なき時は、火の見臺或は物干場等を利用するか、又は屋上に平板を乗せて其上に平列するが宜しい、而し此場合には強風を避くべき用意が肝要で有る。

鉢棚は地上三尺位の高さとなし、而して地中に丸杭を打ち込み、此杭の上部に幅一尺乃至二尺位の平板を打ち附け、此上に鉢を一列

或は二列に並ぶるか又は棚を梯子段の如く拵へて鉢を並列するが善い、而して此段は間隔を各五寸位とし、而して其板の幅は一尺位か或は其以下にても宜しい、而して鉢棚に鉢を並列するに一列なれば其大小に憑りて順次右又は左方より並べ、二列なる時は大鉢を後部へ小鉢を前部へ並列することが肝要で有ります。

第七章　雨覆

朝顔は日光を好む植物なれば、苗を移植したる當時以外には別段日覆ひをなすの必要は無けれども、甚しき降雨に遭遇する時は其葉を黄凋せしめ、剰へ樹を衰弱せしむる者なれば、花壇又は鉢棚を設置する處にては雨覆を備ふるを肝要とす、而して雨覆は硝子障子又は油紙障子を用ひて〈形に屋根を製作するが善い、尤も硝子障子を用ふるに當り其續目に木の桟を用ふる者有るも、こは自然雨水の浸入する恐れ有れば、ポテに亞麻仁油を混合して能く煉り合し、之れ

にて硝子を密着するが宜しい、而して何れも其周圍（尤も南面を除く）は葭簀にて圍ひ、雨水の懸らざる樣に注意肝要で有る。

又屋上、物干し場等にて培養するにも此雨覆の設備をなすか或は何時にても容易に屋内或は檐下等に收容し得べき樣になし置くが善い、又地床に種子を播きたる時の雨覆ひは油紙障子を用ふるか又は莚或は菰等を床上一尺位の高さに覆ふが宜しい。

第八章　名札

朝顔には種類多きだけ又夫れ丈名稱も多い、然るが故に此名稱を表示すべき名札は必須缺くべからざる者で有る、即ち苗床に種子を蒔く時、又は之れを移植する場合、或は種子採收の時等には此名札に憑りて其何咲にて何色なるかを了知せざれば他に良法なければ、正確明瞭且つ詳細に認め置くことが肝要で有る。

此名札は地植用の者は幅一寸位、長さ一尺乃至一尺五寸位、又鉢

植用の者は長さ四寸乃至六寸、幅五分位の細木か、或は木の代りに金屬製の者を用ふるか、又は其形を制札の如くするも宜しい。

而して之れを立つるには圃地にて畦の南北に通ずる者は南向きとなし、其東西に通ずる者は東向きとなし、又鉢植なれば東或は南向きに立て、何れも相一致せしめ置くことが肝要で有る、名札は其立て方の如何に憑りて其名稱見憎きのみならず、之れが保存の日數に影響を及ぼす者なれば注意すべきとで有ります。

第九章　支柱

朝顔は元來蔓性の植物なれば、必ず支柱をなして其蔓を卷かしむることが肝要で有る、但し矮性の蔓無性等の者は其必要無し、而して此支柱は地植の者には一本又は二本竹を立つるか、或は綠門形、家屋形、軍艦形、電車形、飛行機形等其他種々意匠を擬して支柱を拵へ、之れに朝顔の蔓を纏らしむるも妙で有る、而して鉢植の者には

細き竹又は簀を鉢の周圍に三本乃至四五本立て、其高さは朝顔の種類に憑りて長短有るも先づ一尺四五寸位となし、之れに細竹又は針金の輪形を三段乃至五段に結び付くるので有る。

此輪形の大さは其下段は鉢の内廻りの圓さ、殘りは鉢の外廓の大さとなし、而して下段の者は鉢上三寸位の所へ、又中、上段も各三寸位を隔てゝ設けるので、其下段は支柱の内方に此輪形を入れ、中段は其外方に出し、上段は又其内方に入れ、何れも之れを細糸にて堅く縛りて結び付けるが宜しい。

而して朝顔の蔓生長して四寸位に達すれば、此輪形に左より右へ中莖の柔軟となりたる頃を見計ひて、其度毎に卷き付けば蔓の折るゝ憂なくして至極宜し、大体朝顔の蔓は自然左卷きとなる者なれば必ず左卷となすを要す、若し之れに反して右卷となす時は其莖を損傷し、又は朝顔自身が卷き隔るゝ者で有るから注意肝腎です。

第十章　灌水

朝顔の種子を播下して其發芽する迄は、常に土面に適當の濕氣を保つ程度に灌水せば發芽早く又精氣旺盛で有る、然れど若し乾燥に過ぐる時は、往々發芽せずして所謂石種子となり、又其濕氣に過ぐる時は、腐敗するか又は腐敗せざるも其莖根部の徒らに伸長せる苗を生ずる憂が有る。

而して其發芽せる幼苗の當時は濕潤よりも寧ろ乾燥の方が成蹟良好なれば、土面の乾燥を見て灌水する位が適當で有る、又稍生長して本葉五六枚を出したる後、約一週間も經過せば毎夕一回、乾燥甚しき時は二回灌水をなし、又土面の乾かざる時は其灌水を見合すとが肝要で有る、何となれば此際猥りに度々灌水をなす時は、朝顔の葉にのみ精氣付きて其花蕾の發育不良となるからで有る、而し朝顔の花咲き初むるに至れば毎日午前十時頃と、午後五時頃と二回灌水

をなし、又其乾燥甚しき時は午前十時と午後二時と、午後六時頃の三回灌水をなすが宜しい。

大体朝顔の灌水は過ぎたるよりも寧ろ控え目の方が花の色澤艶麗なる者で有る、然るが故に地植の者には猥りに灌水せざるを可とす然れど之れとても土地の乾燥甚しき時は朝顔の萎凋を來し、終には枯死する憂無きに非ず、殊に甚しき萎凋にて精氣の回復に四五日を要するが如き極端に至らば、假令回復するとも其花輪小さくなる恐れ有れば注意すべきことです。

灌水は必ず一日位汲み置きの者を用ふることが肝要で有る、之れ井戸又は河等より汲み立ての水は、朝顔の保有する温度とは自然差異有る者なれば、之れを直に朝顔に灌がば夫れが爲めに其温度を激變せしめて大害を釀す者で有る。

又灌水は朝顔の根元へ叮嚀に如露にて與ふるが善い、若し之れに

反して樹の蔓、葉、蕾、花等を顧みずして注水する時は、葉は黄凋し、蕾又は花は變色する、又葉は蒸發、呼吸、同化等の作用を營む者で有るのに、黄凋の爲めに之れを妨げられて自然樹の衰弱を來し終には枯死するに至る者なれば慎むべきことで有ります。

第十一章　施肥

朝顔の肥料は主に人糞・鶏糞、蠶糞、干鰛、油粕、大豆粕、人造肥料等で有る、而して之れは一は原肥として移植の際に與へ、又一は追肥として隨時に施與するので有る、原肥には豫め施肥以前に等分の培養土と混和して能く醗酵せしめ置きたる者を用ゐ、又追肥には油粕は同粉末一升に水一斗の割合に調合し、又鶏糞、蠶糞、干鰛等は適宜の水中に投入して能く腐熟せしめ、施肥の際には何れも之れに十倍乃至十二三倍の水を加へて與ふるが宜しい、若し此等の新鮮なる者、又は其濃厚なる者を施與する時は効能勘きのみならず却

つて害を及ぼす恐れが有る。

之れを施肥するには大輪物は移植後二三日目に施與し、而して蕾の出でゝ大きくなれば此施肥を止め、又開花後に施肥して次の花を咲かしむるに努むべく、又孔雀咲の類は施肥を控え目となすが善い何となれば施肥多き時は蔓過大となりて孔雀咲を減ずるからで有る殊に縮緬葉の孔雀は猶更で有ります、又變化物の中にて渦葉、桐葉又は手長性の者は施肥を多くし、獅子咲は施肥を少なくするとが肝要で有ります、而して美花を愛賞するに非ずして唯だ單に種子を採收せんとするには、最初一回位施肥するは可なれど、其他は全く施肥の必要は無い、若し猥りに施肥する時は枝葉のみ著しく繁茂して其開花多からず、從つて結實も亦尠なき者で有る。

要するに朝顔の施肥は、專ら其樹の盛衰如何に憑りて適宜斟酌するとが肝實で有る、卽ち樹の精氣衰ふる時は灌水の度を減じて其代

りに水肥を施與する度數を增加し、又其精氣頗る旺盛なる時は水肥の施與度數を減じ、且つ灌水の量をも控ゆるが宜しい。

第十二章　手當

朝顔の花の大輪なるを望むには、蔓は一本仕立として他の枝蔓は悉く摘み取るが善い、若し此枝蔓を摘取せずして多く出し置く時は、到底理想的の大輪花は咲かざる者で有る、而して其蔓に蕾約拾個位も付かば其餘の蔓先きを摘み取りて芽止をなすとが肝要で有る又咲分、變化物等は本葉五六枚を出したる時に、其葉の股より芽出す枝葉の强健なる者、或は風致有る者を三四本殘し、其他の者は悉く摘除して大低蔓の三尺位に伸長したる頃に芽止めをなし、分枝は出づる毎に摘み去るが宜しい、但し蔓無性一名木立性の者、又は蔓の餘り伸長せざる者は蔓、枝葉共に摘去の必要は無い。

而して其何れにせよ、毎朝、朝顔の花を觀賞せば成るべく早くに

其花を摘去するが善い（採種用の者は此限に非ず）、若し之れを摘さずして午後迄も其儘に放任し置く時は、既に其花粉の交接を了へ、從つて其樹の成養分を奪はれて、次に咲くべき花に惡影響を及ぼす者で有る、又花の蕾を間引けば何れも劣らざる美花の咲く者で有る然るが故に一節に二三の蕾を有する者は、適當の者を一つ殘して他は悉く摘み去るが善い。

朝顔の花は咲き初めは何れも大輪なれども、漸次小輪となることが有る、此場合には其根元の土を少しく掻き起して原肥用の土を補充し、且つ灌水を控えて其代りに水肥を施與すれば、數日にして勢力頓に加はりて次には大輪の花咲く者で有る、又鉢植の者は開花期の半ば過ぎに至れば往々鉢底に鬚根の團塊を來し、大に其精氣を失することが有る、此時には水肥を時々施與し、且つ火箸等にて鉢の土中に無數の穴を穿ちて、其肥料分を鉢の全面に波及せしめば、元氣大

に加はる者で有る。

花の悉く咲き終りたる時は、古き蔓は全部摘除きて其新芽に手當すれば、小葉にて實に可憐なる花の咲く者で有る、世人は之れを再生或は復出等と稱して賞讃せらる。

朝顔の地植、花壇植等にて雨覆ひの設備無き者は、降雨の際に其土面を叩かれて土は飛び上り、樹を害すること甚しきが故に、此場合には苗の活着後に土上に小石又は卵の殼、或は切藁等を敷か、又は苔を覆ひて之れを防ぐが善い、而して這は鉢植の者に應用するも亦妙で有る。

雜草は朝顔の培養に最も忌む者なれば、努めて之れを除去することが肝要で有る、若し雜草の繁茂を顧みざる時は、樹の精氣衰退し終には枯死するに至る、殊に幼苗は夫れが爲めに消え絶ゆることが有る

朝顔は日當り風通り好き處にて培養すれば害虫の發生少なきも、

若し害虫を認めば直に其驅除をなすことが必要で有る、卽ち其大虫は摘取りて死殺するか或は燒き殺し、又小虫は除虫粉をバラ筆に含ませて其莖又は葉に附着せるを掃き取りて殺すか、或は殺虫乳劑の五十倍液を噴霧器にて撒布して驅除するが宜しい。

第十三章　繁殖法

第一項　實生法

朝顔は主に實生、卽ち種子を蒔きて之れを繁殖する者で有る。而して播種の方法に就ては前第三章に記述したれば參照せられたし。

第二項　挿木法

朝顔の挿木をおすには、成育旺盛なる小枝を撰び、之れを凡そ三四寸位の長さに切り、箱又は平鉢に砂七分に培養土三分を混合したる者を入るゝか、又は砂交りの圃地へ斜めに挿入し、而して箱又は鉢なれば其上部に硝子板を乘せ、其上へ紙を覆ひ、又圃地に挿木したる者は、强き日光の當らざる樣に日覆ひをなし、何れも其枝蔓に水の懸らざる樣に如露にて適宜に其根元に灌水するので有る、斯くすれば大低七八日間位にして新根を生ずる者で有る、からして其良苗を撰びて鉢に移植し、之れを培養すれば小朝顔となりて頗る妙だ

第三項　接木法

朝顔の接木は其接ぐべき臺木と、接がんとする者とを二本一鉢に栽植するか、又は各鉢を一所に寄せ集めて、双方を四分位の長さに淺く削り、而して之れを密着せしめ、其上を油紙又は竹の皮等にて捲き、其又上を麻糸或は軟かき打藁等にて克く縛り置き、一ケ月程經過して後其活着を認めば此縛りを解き、一方の不用の蔓を切取るので有る。

此方法は一本の接木のみならず、三四本を同時に接ぐことを得る、然るが故に若し白、紅、紺、紫等の各種を一株に接木せば、各異色

の花咲きて實に珍奇妙々である、又此接木は甘藷の蔓にも應用することが出來る、而して其場合には親芋に近き蔓を撰ぶが宜しい。

第四項　宿根法

是れは今年の樹を翌年迄も生存せしむる方法にて、正樹物等の如く結實する種類には其必要を認めざれども、牡丹咲の出物等に行ふ時は實に面白い、假令ば總風鈴獅子咲牡丹の出物等に此方法を行はゞ翌年も亦其珍花を見るを得るので有る、而して之れを行ふには、九、十月頃即ち花の終りたる頃に精力強き者を撰びて、其儘一尺位の大鉢に移植し、之れを溫室又は完全なる暖室内に入れて懇切叮嚀に培養すれば、翌年再び葉を出して開花する、然れど其手入れの不行屆なる時は枯死するを免れざれば注意肝腎で有ります。

第五項　朝顔の變種

朝顔の變種の生ずるは主に花粉の交接、或は系統遺傳、又は畸形

の偶出等に憑る、即ち風又は昆虫類の媒介に憑て、異種の者と花粉の交接をなす時は其次代には雜種となる、假令ば白色と紅色との花紛を交接すれば薄紅色の者を生じ、又中には其一方に酷似する所の白色、紅色等の者を生ずるも、大体は其原種よりは幾分か變化した る者となる。

又其花形に於ても丸咲の者と菊咲の者とを交接すれば其中間の者或は其一方に類似したる者を生じ、葉も亦鍬形葉と抱葉との交接種は鍬形抱葉となり、黄葉と鍬形葉との交接種は黄鍬形葉となり、斑入葉と七幅葉との交接種は斑入七幅葉となるが如し。

又朝顔に限らず總て動植物には系統が有る、此系統は何代を經過するも決して全滅する者では無い、然るが故に假令中間一二代は特性現出せざる事有りと雖も、其子孫に至りて必ず現出する、此現象を系統遺傳と云ふ、彼の牡丹咲の系統を有する者は、假令一二年間

は全く一の出物なく、親木の者のみなりとするも、次の年には其中より牡丹咲の出づる者で有る。

又偶然に畸形の者を現出する事が有る、即ち青葉の者より黄葉を出し、又常葉の者より往々林風葉又は斑入葉を出し、又瑠璃色覆輪より吹掛絞り等を出すが如きことも有ります。

右に述べたるが如く朝顔は自然的に於て千變萬化する者にて、年々歳々不變の者なりと云ふを得ざれば、朝顔を培養する方は此理由をも能く了知せられたし。

第六項　人工媒介法

前項に述べたる朝顔の變種は天然自然的の現象なれども、今茲に云はんとする者は、人爲的に花粉の交接を行ひて其變種、換言すれば新種を作出する方法で有る、即ち此人工媒介法を年々繰返して改良に改良を加ふる時は、遂には理想的の花形、花色、或は葉形、葉

色等を作出し得らるゝ者で有る。

是れを行ふには目的の甲の花中の雄蕊を摘除し、乙の花の雄蕊の花粉をバラ筆の先端等にて振ひ取り、直に甲の花の雌蕊に附着し、而して適宜の紙袋を覆ひ置くので有る、何とあれば此紙袋を覆はざる時は、又他の花粉と交接する恐れが有るからだ、又此人工媒介は花の開きし後は自然に花粉の交接をなす憂有れば、必ず開花前即ち早朝より用意して其開花を待ちて直に行ふが宜しい。

第十四章　朝顔の妙法

第一項　人工夜開法

是れは朝顔を夜間に開花せしむる方法で有る、此法は幾分花の色澤を失ふ嫌ひ有れども、兎に角珍奇ありとして世人に愛賞せらるゝ者なれば、夜會等に出せば大に妙で有る。

是れを行ふには花の蕾を蜘蛛の糸にて卷き、鉢と共に井戸の中へ

釣り下げ置くので有る、即ち鉢植の儘井戸の水邊より一尺位上の處へ迄釣り下げ置き、夕方に之れを上げて其卷きたる蜘蛛の糸を取れば花はパッと開く、而して這は曾に當夜のみならず翌日の夕方にても亦此方法を應用し得ると云ふ。

第二項　人工變色法

是れは朝顔の花色を即座に變色せしむる方法で有る、即ち明礬の如きアルカリー性の液を以て紅色の花を潤す時は、見る〳〵中に青色に變化し、又紫色の花は塩酸或は硫酸等の如き酸性を有する稀薄液に浸せば赤色に變化する、又朝早く起き出で、酢を筆に附けて文字或は圖畫等を花に書き置かば、其儘に之れを表示すと云ふ、這は一時的では有るが人目を樂ましむる者で有る。

第三項　水揚法

朝顔は元來花葉等の性質虛弱にして其蔓を切取らば暫時間にして

萎凋する者で有ります、然るが故に之れを花瓶等に挿すには必ず水揚法を行ふことが肝要で有る、而して其方法は朝顔の咲き終りの花なれば蔓の切口を炭火にて燒けば終日能く其開花を保つも、然らざる者にありては、先づ早朝に花を蔓と共に適宜に切取り、其蔓先き即ち水中に入るべき部分を熱したる燒酎或は上等の清酒又は薄きアルコール液に浸して直に花瓶に挿入するが宜しい、斯くすれば永く保存し得らるゝ者で有ります。

第十五章　種子

第一項　種子の良否

朝顔の種子には其外面の黑色なる者と白色なる者との二種が有る而して其色にも亦濃淡が有ります、昔朝顔を牽牛子と云ひし時代には、黑種子を黑丑と稱し、又白種子を白丑と稱へしとの事だ。

却說朝顔は主に種子を蒔きて培養する者なれば、良き種子を撰ぶ

とが最も緊要で有ります、何となれば若しも其種子の不良なる時は一意専心之れが培養に努むとも、到底良成蹟を擧ぐることは不可能で有るからだ、然れば如何なる種子を善良なりやと云ふに、朝顔の種類に憑りて其形狀大小等を異にし、從つて一概に述べ難きも、大体に於て正樹物、大輪物の種子は肉質充滿せる者を佳良とし、又變化物の種子は、比較的小粒にして實入の惡しきが如き者、卽ち種子の外皮に皺の如き凸凹を生ずる者よりは多く牡丹咲の出物出で、又實入好く且つ大粒なる者よりは多く獅子咲の出物出づ、然れど時には右に反したる種子より出物の出づる事も有ります、又種子の圓形にして凸凹有る者は多く南天葉出で、黑地の中に茶色に條紋を有し、且つ凸凹有る者は多く斑入葉の者と認めらる、而して此等は啻に種子の表面上に就きての事なれども、又其内面卽ち子實の良否は最も大影響を及ぼす者なれば、深き注意が肝要で有ります。

第二項　種子の採收

朝顔の種子を採收せんには、之れを地植となして肥料を施與せず且つ土地の乾燥するに非ざれば灌水せざる位の程度に培養し、而して其芽又は蔓等は自然の儘に任せて餘り摘み取らざる方が結實が多い、世には種子採收の目的なるにも拘らず、之れを鉢植となし、又中には鉢と共に地中に埋むる者有れども此等は何れも良法で無い、又施肥又び灌水の量多きに過ぐる時は、樹の精氣著しく增進して能く繁茂すると雖も其結實は比較的に少なき者で有ります。

又同一の蔓の中にも花の大小及び花形の正、不正、花色の濃淡等が有ります、殊に咲分等に有りては、判然咲分の花と然らずして絣の如き者、又は絞りの如き者が有る、然るに此等を忽諸に附して顧みざる時は、大輪花は何時しか中輪となり、又花形は自然に崩れて不正となり、花色は次等に褪めて淡くなり、又咲分は絣とも絞とも

何とも云ひ難き程に劣等化する憂が有ります、然るが故に種子採收の場合には、其花形大にして整然たる者及び色の最も好き者を撰び開花の際に一々印を附け置き、他の不用の花は成るべく摘み採りて目的の結實を採收することが肝要で有ります。

又變化物は親木の花紺色を呈する者は出物の花色濃く、且つ變化が多い、然れど納戸色の者は出物の花色は淡きもので有る、又親木の葉は通常丸葉の者より多く出物の出づる者なれば能く注意すべき事で有ります。

又總体に於て正樹物、大輪物の種子は初期の者即ち早熟の者を採り、變化物の種子は終期即ち成るべく遲く咲きたる花の種子を採るが宜しい、何となれば早熟の者は其種子の實入善く、又變化物の遲咲の種子よりは比較的に出物が多いからで有る。

朝顔の種子は蔓と共に刈取り、能く乾燥したる頃に好き種子を撰

別して莢の儘採收し、之れを其儘貯藏するか、又は整理して貯へ置くが宜しい。

第十六章　朝顔の標本

第一項　寫生畫と寫眞

朝顔の花形、色彩、葉形等を標本となすには、之れを寫生するが善い、然し寫生の素養なき者は寫眞に撮影して其形容標本を作るが宜しい、而して寫生畫又は寫眞に就きては世人の能く了知せらるゝ所なれば今茲には其說明を省略す、而して標本には其何れにせよ、朝顔の名稱、花色、產地、採集の年月日等其他を明細に記示し置くが宜しい。

第二項　腊

花

朝顔の腊花は花又は葉を摘取りて之れを整理し、紙の間に狹みて板臺の上に吸取紙の如き水分を吸收し易き紙を敷き、其上に前の紙

に狹みたる者を置き、其上へ又吸取紙を敷き、順次斯くの如くして後に壓板を載せ、板の上に重石を置きて平等に能く壓へ付け、而して最初は一日に二回之れを解きて敷紙を乾燥せる吸取紙と取換へ、二三日を經過せば、一日に一回位取換へ、其後は二三日毎に一回之れを取換へ、大約十二三日間を經ば能く乾燥する者で有る、然れば其適當の頃を見計らひて之れを板臺より取出し、紙に狹める花又は葉を厚き洋紙の上に乗せ、其形狀、配置等を正し、各要所を細小なる紙片にて離れざる樣に支へ置くので有る、此際には**アラビヤゴム**又は不蝕糊等を用ふるが宜しい、而して出來上れば適宜の箱に收容して整列し置き、其箱内へは別に香晶又は樟腦を紙に包みて入れ置かば、虫害に罹る憂無くして永く保存し得らるゝ者で有ります。

第三項　アルコール浸液

朝顔の**アルコール**浸液は色澤を失するの嫌ひは有れど、花形及び

葉形の肉質の標本としては最も好適で有る、而して之れを行ふには朝顔の花なれば其萎まざる中に之れを摘み取り、又葉は適當の者を撰び、而して適宜の容器即ち硝子瓶等に**アルコール**を入れたる液中に之れを投入し、密閉し置くので有ります、尙ほ後日**アルコール**液よりも他に好き良液を發見するに至らば、其色澤をも永く保存し得らるゝことと思ひます。

後水尾天皇御製

朝顔は朝ぁ朝ぁに咲きかゑて
盛り久しき花にぞありける、

新院御製（續千載集）

朝がほの花は籬にうゑてみむ
常ぁらぬ世を思ひしるやと、

花園左大臣家小大進

如何にして思ひ捨てまし朝顔の
昨日の花のあり難き世を、

朝顔の花に鳴ゆく蚊の弱り　芭蕉
朝顔にしなれし人や襲帽子　其角
朝顔の這ふてしたゝる柳かな　闇指
朝顔やひくみの水に殘る月　胡及
朝顔につるべ取られて貰ひ水　千代女
朝顔や垣そのまゝのしだら草　文鱗
朝顔のつぼみや明日も遠きもの　雪雄
朝顔にたちかへれとやみづの物　其角
あさ顔や初雪よりもめつらしき　道彦
阿佐加保の何處迄曼の行く事ぞ　一樂
あさがほに夫婦の杖をふらべ鳧　蒼虬
あさがほの一夜は長きつぼみ哉　木兒
あさがほや垣ほがらかに殘る月　浪兒
あさ顔は時しの間にて美しや　才麿
朝がほや月と旭と垣一重　山水
あさかほや君が御園も賤が家も　柳水
あさかほの感化床しや朝寢坊　士吟
朝顔の蕾の内を蕭肇かな　秋月
朝顔もこんと咲きけり明の鐘　也有
朝顔の乘せて開きぬ露一つ　瓢齊
あさかほの禮をうけゝり垣隣り　芳英
朝顔の白きは露も見えぬかり　荷兮
朝顔の垣や浴衣のほし忘れ　也有
隣かる朝顔竹にうつしけり　鷗歩

牽牛花　中烏樓隱

自レ夏達レ秋殆十旬
碧花承レ露幾番新
陳言敢歎榮哀速
却勝群芳不レ盡レ春

露のひぬ間　熊澤蕃山

露のひぬ間のあさがほを
照らす日かげいつれるさや
あはれひさむらさめの
はら〳〵とふれよかし

第十七章　朝顔の來歷

朝顔は植物學上、顯花植物、被子類、双子葉部、旋花科に屬する左卷性蔓草にして、雅名をかゞみくさ、めさましくさ、しのゝめくさ等と稱し、唐名を牽牛子又は蕣と云ひ、洋名をモーニング、グロリー（Mornin-gglory）と云ふ。

朝顔の祖先は如何なる者なりしや、之れを了知するに由なきも、太古の時代より既に我國の原野に自生せし者なりと云ふ說が有る、然れど歲月の久しき間世人は之れを知らざりし者か、又は認知するも唯だ野生の草として顧みざりし者か、記錄の徵すべき者とても無し、又朝顔は　平城天皇（人皇第五十一代）の御世に、支那即ち李唐より藥品（下劑）として牽牛子の種子の舶來せしに始まると云ふ說も有る、果して其何れが正實なるやは詳で有りません。

今古書に憑りて調ぶるに、本朝綱目に曰く

牽牛子始出田野人一　牽レ牛謝藥故以名レ之二

と有り、之れに憑りて見れば、朝顔を牽牛子と稱するは、支那にて野人の牛を牽きて之れを求め、藥となしたるに初まるが如し、又萬葉集の山上臣憶良の歌に、秋野花二首を詠すとて

秋の野に咲きたる花をおよびをり
かきかそふれば七種の花。

萩の花を花葛花なでしこの花
をみなへしまた藤袴朝顔の花。

と有り、此あさがほとは牽牛子と云ふ意味に非ずして、木槿の事なりと云ふ人が有る、而し木槿は草にあらねば、這は桔梗の事なりと稱ふる者、又は現在の喜顔ならんか？等と稱へ、其說區々として一定しない。

古今和歌集の矢田部名實の歌に、けにごしと題して

うちつけにごしとや花の色を見ん
をく白露のそむるばかりを。

と見ゆ、此けにごしとは牽牛子の事にて、昔は音を以て之れを稱したる者なりと云ふ、又延喜式藥草の部に牽牛子の文字が有る、是れが我國の書に現はれたる嚆矢ならんと云ふことで有る。

又源順の和名抄に初めて牽牛子を阿佐加保と訓じ、木槿牽牛子も亦阿佐加保と訓ずるも、同名にして異種なりと見ゆ、然れば此時代よりあさがほと稱へしことは明かで有ります。

又貝原益軒の大和本艸に「朝間花容美はしく、晛を見れば則ち萎む、故に朝顔と號く」と見ゆ、されば朝顔とは後世の名にして、其最初は牽牛子（けにごし）と云ひし者ならん、而して園藝書類に始めて記されしは

寛文四年（大正四年より二百五十年前）の著書、花壇綱目で有る、此書中には「朝

顔の花は淺黄と白の二品あるのみ」と見ゆ。之れに憑りて見れば此當時は唯だ淺黄と白との二品ありしとが判る。

次に元祿三年（大年四年より二百廿五年前）板の畫夜調法記の中には「朝顔の花は淺黄、白、薄紫の三品あり」と見ゆれば　此時代には三品有りしなり。

又元祿八年（大正四年より二百二十年前）板の花壇地錦抄には「朝顔は淺黄、白、赤（うすあかし）瑠璃の四品あり」と見ゆ。

是れに憑りて推察すれば、寛文四年より元祿八年迄の三十年間に薄紫、赤、瑠璃の三品を增加したるが如し、而して是れは朝顔を培養する間に於て色變りの者を作出したる者か、或は他國より輸入せし者なるやは詳ならざるも、兎に角今日の如く無量數百種の種類を有するに至りし所以の者は、要するに爾後朝顔培養の旺盛に伴ひて、人爲的改良の結果、其花及び葉等に著しき變化を來したるに

憑る者なることは明かで有ります。

第十八章　朝顔の種類

朝顔の種類は頗る多きも、之れを大別すれば正樹物と變化物との二種となる。

正樹物とは開花せる樹に種子を結實し、而して是れを播種すれば又同じく其花を咲く者を云ふ、卽ち丸咲、咲分、菊咲、五切咲、茶臺咲等は是れで有る、而して丸咲、咲分、菊咲等の花輪大なる者を普通に大輪咲と云ふ。

變化物とは獅子咲、牡丹咲、切子咲、拂子咲等にて、夫れ〳〵花の獅子咲、牡丹咲、切子咲、拂子咲となる者と、然らずして丸咲或は臺咲等の咲く者を云ふ、而して前者を出物と稱し、後者を親木と云ふ、此出物は美花を開くも種子を結ばず、其親木に種子を結ぶ、然るが故に此親木の種子を採收して翌年之れを播種せば　其中より

又出物の出づる者で有ります。

次に朝顔の主なる種類を左に列擧せん。

▲丸　咲　花は丸く咲き、而して其花輪に大小有り。又花色及び葉形も種々有ります。

▲咲　分　一花に白と紅、紺と白、鼠と紅、紫と鼠と藤色等の如く二色或は三色に染分、又は星入、絣入、桔梗形入等となりて咲く者で有ります。

▲菊　咲　不正の菊に類似し、花色には種々有れども、葉は主に七幅葉で有る、又菊咲の亂るゝ者を亂菊咲と云ふ。

▲五切咲　花辨の五つに切れ有る者にて、一名を切咲とも云ふ、花色は種々有り。

△茶筌咲　花辨五つに切るゝも、細長く直立して、恰も茶筌の如き形を呈し、花色も亦種々有り。

△石疊咲　五切咲の中にて其花辨最も深く裂け、且つ相重積して恰も石疊の如き狀を呈して垂下す、一名を石疊采配咲とも云ふ種々の花色が有ります。

△櫻　咲　切咲の花形恰も櫻花の如き者を云ふ。

△梅　咲　其梅花に似たる者を云ふ。

△捻梅咲　梅咲の捻ぢれたるが如き形を呈す。

△撫子咲　撫子の花に似たる者を云ふ。

△桔梗咲　桔梗の花に似たる者を云ふ、又八重桔梗咲とて其花辨の相重積する者も有ります。

△卷絹咲　五切咲の花の先端卷き居る者を云ふ。

△龍膽咲　龍膽の花の如く全開せずして、恰も半開せるが如き者花形恰も茶臺の如き樣を呈す、而して其花色は種々有ります、一名之れを臺咲とも云ふ。

▲茶臺咲

△雀咲　茶臺咲の花の脉絡の切る、者を云ふ。

△孔雀咲　臺咲の蕋の花辨となりて長く突出する者を云ふ、又雀咲にて孔雀咲なるを眉間尺咲と云ふ。

▲獅子咲　花形恰も獅子の狂ふが如き樣を呈す、然るが故に一名狂獅子咲とも云ふ、又其花の先端に烏甲の如き形を現はす者を烏甲入と云ひ、其下方に向ふ者を風鈴交りと云ひ、又全体風鈴のみなるを總風鈴獅子性と云ふ、花色は種々有ります。

▲牡丹咲　此種類には手長性牡丹、唐花牡丹、軸分牡丹、臺牡丹等有り、又其花色にも色々有ります。

△手長性牡丹　葉柄殊の外長くして、五六寸より七八寸以上に伸長する者が有る、又此花は主に風鈴交りの亂牡丹咲にて頗る艶麗で有まります。

△唐花牡丹　葉莖共に肥大にして大抵蔓をなさず、故に一名を木

立性と云ふ、又其形狀恰も桐苗の如く直立するよりして桐性とも稱す、花は厚くして其中に花片多生し吹詰となる特性を有す又此開花は午後迄も能く保ち、又中には昨日一回開きたる花より今日か明日か、或は明後日かに再び一花を開く二度咲の者も有ります。

△軸分牡丹　莖軸の色を見て牡丹咲となるや否やを鑑定し得らるゝよりして此名有り、花は主に千重の狂咲となり、又二度咲となる、又優等の者には烏甲入、風鈴入等の獅子咲牡丹出づ。

△臺牡丹　臺咲の中より長き花辨又は風鈴、烏甲等を二段或は三段に吹き上げて咲く者で有ります。

▲切子咲　恰も切紙にて作りたる燈籠の如き形を呈す、故に一名之れを切紙燈籠咲と云ふ、花色は種々有り。

▲拂子咲　拂子の如く細く裂けて咲く者にて、中には錨の如き花

又は牡丹咲等の花も出づ、花色は種々有り、又葉は糸の如く細く且つ長くして垂下す、一名之れを拂子葉筋又は細葉筋とも云ふ。

▲平軸　莖軸恰も平帶の如く廣く、中には幅二三四寸に及ぶ者も有る、是れは大鉢に栽植して充分に施肥し、無用の枝を摘去して一本仕立となし、而して其蔓先は摘去せざるが宜しい。

秋雜歌　朝杲朝露負咲雖云暮陰社咲益家禮　（萬葉集）

秋相聞　展轉戀者死友炮然色庭不出朝容貌之花

相聞　和我目豆麻比等波佐久禮杼安佐加保能言出而云忌染朝貌乃穢庭開不出懲爲鴨

等思佐倍巳其登和波佐可流我倍。　源順　（新後拾遺集）

世の中を何に譬へむ夕露も待たで消えぬる朝がほの花　讀人しらず　（後撰和歌集）

諸共になるともむしに打解けて見えにけるかな朝顔の花　讀人しらず

夕暮の寂しきものは朝顔の花をたのめる宿にそありける

第十九章　朝顔の說明

第一項　花色

▲白紅、紫、桃、藍、紺、鼠、瑠璃、灰、藤、柿、水、肉、櫻色等は世人の能く知らるゝ所なれば茲には省略す。

▲納戸色　是れは灰色の少し濃き者を云ふ。

▲梅鼠色　鼠色に少し赤味を帶びたる者。

▲白鼠色　鼠色の淡き者。

▲蝦茶色　當世の女學生袴の如き色を云ふ。

▲古代紫　紫色の濃き者。

▲今紫色　紫色の飛立つが如き氣味の者を云ふ。

▲赤鳩色　鳩の羽色則ち鼠色の濃き者に極少し赤味を帶ぶる者。

▲黑鳩色　赤鳩色に濃き黑味を帶ぶる者を云ふ。

▲紅梅色　紅に極少し紫色を帶びたる者にて洋紅色と同じ。

▲瑠璃紺　瑠璃色に紺色の極く濃くして光輝有る者。

▲暈　暈とは色交りの判然せざる者、假令ば白に肉色の暈と云へば、白と肉色との境界判然せずして、白より自然に肉色に移るを云ふ。

▲立絞　縦横に粗大なる絞り有る者を云ふ。

▲刷毛目絞　絞りの細き者。

▲染分絞　花の半部分は紅にて、半部分は白地に紅の絞り有るが如きを云ふので、一名を半月絞とも云ふ。

▲友仙絞　友仙模様の如くに絞り有る者。

▲吹掛絞　霧を吹き掛きたるが如く小點有る者を云ふ。

▲吹上絞　花筒より花瓣へ暈色に絞り有る者。

▲黒餅絞　薄色地に濃色の圓大なる斑點が五ヶ所に散在せる者。

▲村雲絞　黒餅絞の斑点數及び其大きさの定まらざる者を云ふ。

▲村雲抜絞　村雲絞の反對に濃色地に薄色の斑點有る者。

▲桔梗形入　花の中に桔梗形の色入り有る者を云ふ。

▲車友仙縞　車輪の如き縞有る者。

▲旭光友仙縞　車友仙縞の密にして而して花の縁端に達せず、恰も縞にて旭光の如き觀を呈する者を云ふ。

▲花菱抜絞　花に菱形の色有るを云ふ、一名之れを一掛とも稱す。

▲五所入　花の脉絡に沿ふて他の色有るを云ふ。

▲六所入　前者の六つ有る者を云ふ。

▲十所入　五所入の倍數有る者にて、一名車絞とも稱す。

▲星光紋　六所入の倍數有る者を云ふ。

▲梅形抜絞　濃色地に淡色の梅形有る者。

▲梅鉢抜絞　淡色地に濃色の梅形有る者を云ふ。

▲覆輪　花縁の先端に白き所有るを白覆輪と云ふ、然れど普通は

白の字を省きて唯だ單に覆輪と稱す　而し其覆輪の紅色なる時は之れを紅色覆輪と云ひ、又桃色なれば桃色覆輪と云ふ。

▲糸覆輪　覆輪の細小なる者を云ふ。

▲爪覆輪　花の脈絡の先端にのみ白色有る者。

▲深覆輪　覆輪の部分深大なる者を云ふ。

▲花笠　深覆輪の猶ほ深き者を云ふ。

第二項　葉

▲常葉　朝顔の普通の葉にて一名之れを並葉とも云ふ、而して此葉の者よりは主に丸咲又は咲分等の花咲く者で有ります。

▲丸葉　丸き葉形の者を云ふ。

▲玉葉　丸葉に似たるも少しく寶珠の形を成す者を云ふ。

▲鍬形葉　踏込鍬の如き形をなす者で有ります。

▲三尖葉　鍬形葉の先端の尖れる者を云ふ。

▲鎗形　葉形恰も三本鎗の如き者を云ふ。

▲洲濱葉　常葉の先端尖らずして稍圓形を帶ぶる者を云ふ、而して此葉の者よりは花の六瓣又は七瓣の合瓣となり、苞も亦二個以上出づる特性を有して居ります。

▲七福葉　七福神の異なるが如く　葉形一々相異なる者を云ふ、一名之れを五三葉又は七五三葉とも稱す、又此葉の者よりは主に菊咲或は亂菊咲の花咲く者なれば亂菊葉とも云ふ。

▲蓮葉　蓮の葉に似たる者。

▲喇叭葉　蓮葉に似て喇叭の如き形をなす者を云ふ。

▲梅葉　梅の葉に似たる者を云ふ。

▲孔雀葉　梅葉の稍丸き者にて一名之れを梨葉とも云ふ、又此葉の者よりは多く孔雀咲の出づる者なれば孔雀葉とも稱す。

▲南天葉　葉片三枚に分岐して幅狹く且細長くして、恰も南天の葉

に似たる者にて。此葉の者よりは主に桔梗咲の花咲く。

又其柊の葉に似たる者を柊南天葉と云ひ、蝙蝠に似たる者を蝙蝠南天葉と云ふ、又其葉の裏を返す者を裏卷南天葉と云ふ。

▲笹葉　南天葉の一層細長き者を云ふ。

▲桐葉　桐の葉形に類似し、此葉の者よりは多く唐花牡丹咲出づ

▲水字葉　水の字の形をなす者を云ふ。

▲蜻蛉葉　水字葉の深く切れ込み居る者。又其細き者は蜻蛉糸葉。

▲雲形葉　雲の空中に浮ぶが如く猥りに狂へる者を云ふ。

▲羽扇葉　羽扇の如き形をなす者。

▲雀葉　雀の踊るが如き形をなす者を云ふ。

▲雨龍葉　葉の幅細く縮みて微毛有り恰も雨龍の如き形を呈する者

▲立田葉　立田川は楓の名所なるよりして楓葉の事を立田葉と云ふ

ので有ります、而して此葉の者よりは多く切咲の花咲く。

▲八手葉　葉片多くに分岐して恰も八ッ手の如き形狀を呈する者。

▲渦葉　葉に波動有りて其元の方の卷き重なる者を云ふ、而して此葉の者よりは多く桔梗咲の花咲く者で有ります。

▲羽衣葉　羽衣の如き形をなす者にて、此葉の者より咲く花を羽衣咲と云ふ、即ち其花は花筒の外部に袴獅子の髯を有する者です。

▲抱葉　葉の兩方より卷き上る者にて、獅子咲の者に多い。

▲掬水葉　葉の抱込み深くして恰も水を掬ふが如き者を云ふ、而して此葉の者よりは多く獅子咲の花咲く。

▲握手葉　手を握りたるが如き形をなす者を云ふ。

▲千鳥葉　葉形小さくして三尖となるも、其両翼張らずして恰も千鳥の飛ぶが如き者。

▲柳葉　柳の葉の如く細くして長き者を云ふ。

▲淺澤柳葉　柳葉の柄に近き方廣く且つ入込みたる者を云ふ。

▲林風葉　葉形恰も木の葉の風に散るが如く狂へる者を云ふ、然るが故に假令ば水字林風葉とは水字葉の狂へる者で有ります。

▲縮緬葉　葉の縮み多き者を云ふ、此葉の者には臺咲が多い。

▲砂摺葉　縮緬葉よりも葉面細かく、且つ粗造にして恰も砂を摺り附けたるが如き者を云ふ、臺咲の種類に多い。

▲石目葉　砂摺葉の疎なる者を云ふ。

▲布目葉　葉の地合恰も布目を觀るが如き者を云ふ。

▲網掛葉　布目葉の疎なる者を云ふ。

▲打込葉　葉の所々に凹所有る者にて、一名之れを石打葉と云ふ、此葉は獅子咲の者に多い。

▲黄　葉　葉の黄色を呈する者を云ふ、而して青葉は植物の常なれば普通之れを青葉と云はずして單に葉と云ふ。

▲斑入葉　青葉に淡緑色の斑有るを薄斑と稱へ、其白き斑を白斑と云ひ、又其純白なる者を水晶斑と云ふ、又薄斑と白斑との混淆したるを二重斑或は二色斑と云ひ、又白斑の代りに黄色の斑有るを黄斑と云ふ。

又黄葉に白斑有るを淡雪と稱へ、一名之れを古金蘭或は古金葉と云ふ、而して此黄葉に青斑有るを松島斑と云ひ、松島斑に白斑有るを三色斑又は三國斑と云ふ。

第三項　蕚と苞

朝顔の花の根部に有る蕚は、青緑色を呈して普通は五つの者なれども、中には夫れ以上を有する者もある、而して其多き者を唐松蕚と云ふ、之れは狂牡丹咲の者に多い、又唐花牡丹咲の者には、蕚の六つ乃至七つを有する者も有り、又蕚の全く無き者も有る。

苞とは蕚の下部に位する芽の如き者にて、此苞は普通二個なれども、之れも亦洲濱葉の者には多く有する事があります。

朝がほの露に命をくらぶれば
花のにほひは久しかりけり。　大納言師氏

有りとても頼むべきかは世の中を
知らする物は朝顔の花。　和泉式部

山賤の垣ほにさける朝顔は
東雲おらで逢よしもがな。　貫之

朝顔の花の姿の床しきに
おにこは長き秋の夜そとよ。　俊頼

あす咲かん花やいくつと朝顔の
つぼみ數ふる夕陸もよし。　蓮阿

朝顔をおにはかなしと思ひけむ
ひとをも花はさこそみるらめ。　藤原道臣朝臣

君こすは誰に見せましわかやどの
垣れに咲ける朝顔の花。　讀人知らず（拾遺和歌集）

限りあらは松の千歳も數おらず
よしや一日の花の朝顔。　柏廼舍

最新朝顔培養法　終

大正五年一月八日印刷
大正五年一月十日發行

（最新朝顔培養法）
（定價金貳拾錢）

著作者　大阪市南區天王寺大道三丁目　松澤淳水

發行兼印刷者　大阪市南區天王寺大道三丁目　松澤和藏

發行所　大阪市南區天王寺大道三丁目　松澤商店
（振替大阪一六八三一番）

不許復製

朝顔名鑑（優良の者のみ記載す）

〔大輪咲〕（以下壹袋參粒入貳拾錢）

紫震殿　斑入千鳥葉紫無地
國の光　斑入千鳥葉本紅無地
大平洋　斑入千鳥葉錆納戸地
猩々王　斑入千鳥葉猩々紅地
稲妻　斑入千鳥葉唐桑花笠
岩戸開　斑千鳥葉本紅刷毛目
源平　斑入千鳥葉紅深覆輪
大正光　黄千鳥葉紫花笠覆輪
女學生　黄千鳥葉海老茶無地
富士山　黄千鳥葉白底紅大輪
花の錦　黄千鳥葉赤爪覆輪

敷島の衣　黄千鳥葉唐紫無地
霞の衣　黄千鳥葉納戸無地
東洋譽　黄千鳥葉紫無地大輪
地雷火　黄千鳥葉本紅鳴見紋
硯の海　黄千鳥葉黑鳩無地
大西洋　青千鳥葉紺天鷲絨
琵琶湖　青千鳥葉紺青無地
汀の友　青千鳥葉白色底紅美
鴨緑江　古金千鳥葉錆納戸
雪の曉　千鳥葉白ニ肉ボカシ
勇肌　斑入鍬形葉紺鳴見紋
大盃　青鍬形葉本紅無地
神代衣　黄蜻蛉葉大和柿大輪

大軍鑑　黄千鳥葉唐桑無地
老獅子　黄千鳥葉大和柿覆輪
大海波　青千鳥葉唐紺青無地
岩戸鏡　千鳥葉海老色刷毛目
舞姫衣　青千鳥葉本紅覆輪
養老瀧　斑入千鳥葉薄柿覆輪
獅子遊　斑入千鳥葉薄柿無地
大和譽　斑入千鳥葉本紅無地
大極殿　黄蜻蛉葉紺青天鷲絨
祝花火　青蜻蛉葉本紅鳴見絞
初日影　斑入葉小野紅覆輪
大關　斑入葉紺青天鷲絨

（以下壹袋參粒入拾五錢）

朝日　斑入蜻蛉葉紅無地
三笠山　鍬形葉納戸花笠覆輪
神代錦　青鍬形葉大和柿無地
矢車　青鍬形葉唐桑爪覆輪
小町櫻　青鍬形葉藤桃色無地
新天地　黄鍬形葉葡萄紫覆輪
梅の窓　黄鍬形葉白地花笠

（以下壹袋參粒入拾錢）

神茄子風　斑入葉鐵納戸覆輪
初美人　黄鍬千鳥葉唐紺青
貴日本海　青鍬形葉紫色大輪美
深山櫻　青葉錆納戸無地大輪
鍬形葉桃紅無地大輪

嵯峨野の村雨　鍬形葉玉朱紅深覆輪
鍬形葉紺青無地大輪
（尚種々有れども紙面の都合上省略す）

大輪咲（名稱付）拾種揃　金參拾錢

〔咲分〕（以下壹袋參粒入拾五錢）

雲井鶴　常葉鶴羽色藤桃咲分
化粧競　斑入葉紺刷毛咲分
理想咲　青葉紫覆輪刷毛目分

七福葉菊咲（名稱付）拾種揃　金一圓

△茶筌咲混合　壹袋七粒入貳拾錢
△石疊咲混合　壹袋七粒入貳拾錢
△桔梗咲混合　壹袋七粒入貳拾錢
△雀咲混合　壹袋七粒入貳拾錢

▲朝顏種子百種交り　壹袋百粒入拾五錢

〔獅子咲〕（以下壹袋七粒入參拾錢）

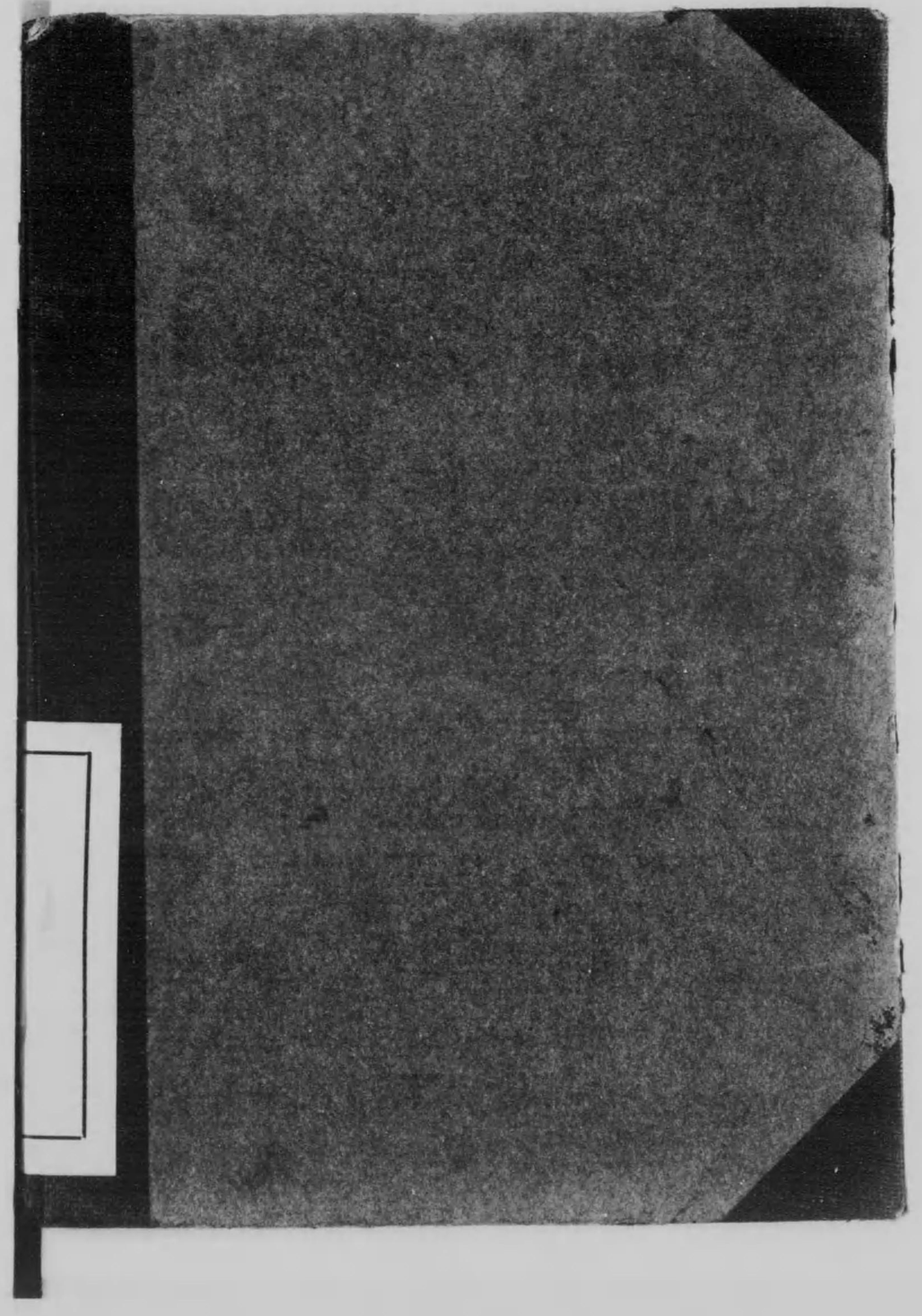
甲號　青掬水葉洗柿總風鈴獅子
乙號　青掬水葉純白風鈴獅子咲
丙號　打込三尖葉桃鳩風銀獅子
丁號　糸南天葉本紫狂獅子咲妙

〔牡丹咲〕（以下壹袋七粒入參拾錢）

いの號　渦斑葉本紅風鈴獅子牡丹
ろの號　雨龍葉紫風鈴臺牡丹咲
はの號　渦三尖葉本紅臺牡丹咲
にの號　渦斑葉紺青風鈴獅子牡丹
ほの號　七幅葉猩々紅亂菊牡丹

右の外種々有れども紙面の都合上省略す

朝顏培養種子販賣
大阪市南區天王寺大道三丁目
松澤商店園藝部
振替口座大阪一六八三一番

70
325

終